

道徳科の授業は、学習指導要領に示される道徳科の目標「道徳教育の目標に基づき、よりよく生きるための基盤となる道徳性を養うため、道徳的諸価値についての理解を基に、自己を見つめ、物事を広い視野から多面的・多角的に考え、人間としての生き方についての考えを深める学習を通して、道徳的な判断力、心情、実践意欲と態度を育てる」に即して実施される必要があります。

ここにあるように道徳科では「道徳的諸価値についての理解を基に、自己を見つめ、物事を広い視野から多面的・多角的に考え、人間としての生き方についての考えを深める学習」が求められていることをまずは確認しましょう。この点について教科書の冒頭のオリエンテーションページで触られています。

1. 生徒とともに学習の進め方を確認しましょう ①。

教科書のオリエンテーションページでは、この「道徳的諸価値についての理解を基に、自己を見つめ、物事を広い視野から多面的・多角的に考え、人間としての生き方についての考えを深める学習」の記述に即した道徳科の学習の進め方を、教科書によって段階は異なっていますが、示しています。

各学年の第1回目の授業で、この部分に注目させ、道徳の授業ではこれからどのような学習をしていくのかを確認するとよいでしょう。最初の授業だけでなく、毎回の授業のなかでも、自己を見つめることや考えを深めることを促すような声かけを心がけ、道徳科でどのような学習が求められているかを生徒に意識させていくようにしましょう。

A 自分自身

- 自主、自立、自由と責任
- 節度、節制
- 向上心、個性の伸長
- 希望と勇気、克己と強い意志
- 真理の探究、創造

B 人との関わり

- 思いやり、感謝
- 礼儀
- 友情、信頼
- 相互理解、寛容

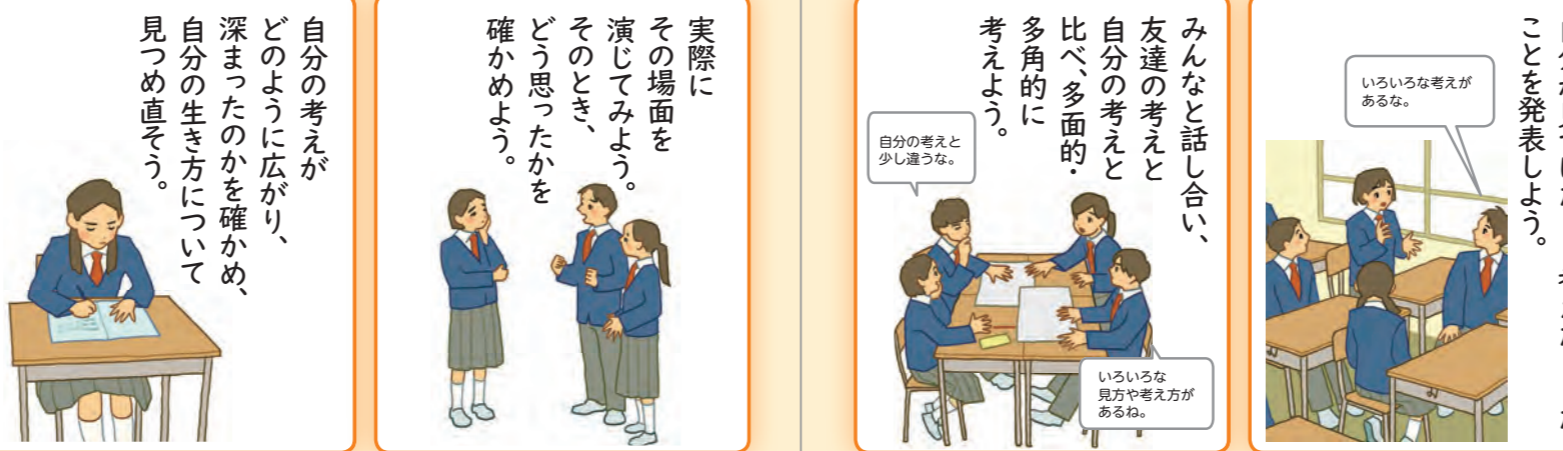
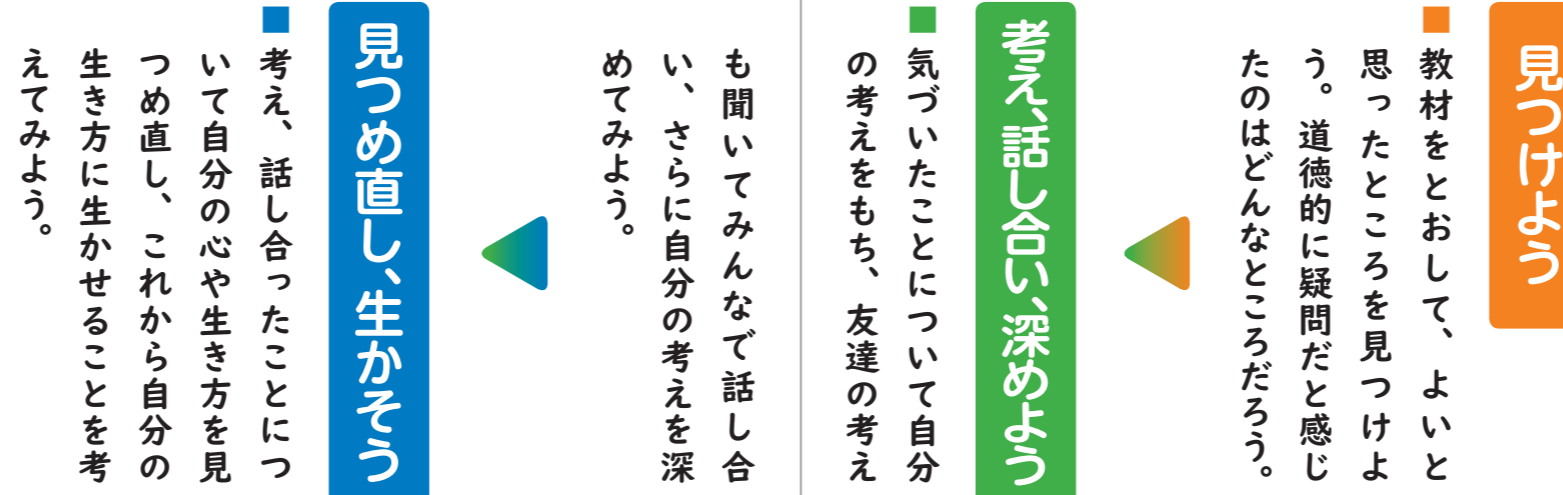
C 集団や社会との関わり

- 遵法精神、公德心 ● 公正、公平、社会正義
- 社会参画、公共の精神 ● 勤労
- 家族愛、家庭生活の充実
- よりよい学校生活、集団生活の充実
- 郷土の伝統と文化の尊重、郷土を愛する態度
- 我が国の伝統と文化の尊重、国を愛する態度
- 国際理解、国際貢献

D 生命や自然、崇高なものとの関わり

- 生命の尊さ
- 自然愛護
- 感動、畏敬の念
- よりよく生きる喜び

道徳科の授業の学び方



2 学びをより深めるために

2. 道徳科の学習方法の例を生かしましょう ②。

オリエンテーションページには道徳科での学習の方法が示されています。例えば、学習指導要領で示された「問題解決的な学習、道徳的行為に関する体験的な学習」等です。

中学校では特に話し合いの仕方について詳しく書かれています。話し合いには率直な意見交換ができる信頼関係が重要ですので、この部分をもとに生徒とともに話し合いのルールなどを確認できるとよいかもしれません。

ここに示されている学習方法を中心に、道徳科で求められる学習が実現できる授業として、効果的と考えられる多様な学習方法を取り入れて取り組んでみましょう。

3. 生徒とともに内容項目の全体像を見通しましょう。

教科書には必ず内容項目と教材との対応関係がわかる記載があります。オリエンテーションページで内容項目の全体像をわかりやすく図示しているものや、巻末などに表として示しているものがあります。

生徒とともに、最初の授業で、1年間で扱う内容項目の全体像を確認するとともに、毎時の学習においても、どこに位置づ

けられる学習なのかを意識させながら取り組むとよいでしょう。

また、道徳科は学校の教育活動全体を通じて行う道徳教育の要として実施されるものです。道徳教育の全体計画を踏まえつつ、他の教育活動での生徒の学習を補ったり、深めたり、捉え直したり、発展させたりすることができるように、生徒とともに他の教育活動との関連を確認しながら、進めていくとよいでしょう。

道徳の教科書の使い方

各時間の進め方

1. ねらい・めあてを生徒と共有した授業を組み立てましょう。

教科書の教材を扱う際には、どの内容項目と関わるのかを確認しましょう。本時のテーマや内容項目が冒頭に記載されている教科書もありますが(③)、記載されていないものもあります。そのため、本時でどの内容項目を扱うのか、また、生徒に何について議論し、考えを深めてもらいたいかを授業前に確認しておく必要があります。これを「ねらい」といいます。

ただ、ねらいは、「達成できた」「できなかった」といった達成目標の考え方をとる他教科と異なり、道徳科では、個々の生徒が自らを振り返りながら人間としての生き方を主体的に形づくっていく方向性を示すものとして組み立てることが求められます。ですから、指導上のねらいは、生徒の実態を踏まえつつ、例えば、「〇〇【内容項目に示される道徳的価値】について、……という学習【道徳的諸価値についての理解を基に、自己を見つめ、物事を多面的・多角的に考え、自己の生き方についての考えを深めるように教材に即して示された学習活動】を通して、△△【道徳的判断力、心情、実践意欲と態度のいずれか、あるいは、複数】という力を育む」という形で示するのが一般的です。

ねらいは学習の進め方を踏まえて育てたい方向性を示したものでしたが、これは教師の側から見たものであって、生徒の側から見た場合は「めあて」といいます。めあては当該の時間で生徒とともに目指していくものですから、あらかじめ共有することが望まれます。例えば、「〇〇ということについて……という学習を通して△△を育む」というねらいを立てた場合、「〇〇について考えていこう」というようなめあてを設定することができます。これを生徒と共有して授業を進めましょう。

2. 教科書の発問を生かしましょう。

(1) 道徳科で求められる学習に即して教科書の発問を捉えましょう。

教科書の教材では、「道徳的諸価値についての理解を基に、自己を見つめ、物事を広い視野から多面的・多角的に考え、人間としての生き方についての考えを深める学習」を促すような発問が設定されています(④)。ここで示される発問が、⑦道徳的諸価値についての理解を問うもの、⑧自己を見つめさせるもの、⑨物事を多面的・多角的に考えさせるもの、⑩自己の生き方についての考えを深めさせるもの、のいずれであるか、あるいは、複数に関わっているかを確認し、⑦~⑩のいずれからの発問であるのかを意識しながら生徒に取

④

「二通の手紙」

元さんが「はればれとした顔」で職場を去ることができたのはなぜでしょうか。

「二通の手紙」


元さんの役を演じてみて、どのように感じたのかを共有しましょう。

「二通の手紙」

「二通の手紙」を並べてみたときに元さんは何を考えさせられたと考えたのでしょうか。

「二通の手紙」

白木みどり



※著作権の関係で、伏字(黒丸)で表現しております。

り組ませることが肝要です。

(2) ねらいに迫る発問を構成しましょう。

授業はねらいに迫るために行われるものです。ですから、ねらいに即して発問を構成する必要があります。教科書の発問もまた、そうした観点から作成されたものですが、ねらいは生徒等の実態に応じて設定されますので、別の発問の方がふさわしいという場合もあります。

ねらいに迫るための発問を「中心発問」といいますが、ねらいの設定が異なれば、中心発問も自ずと変わってくることになるでしょう。教科書の発問について道徳科で求められる学習のどのような視点からのものであるのかを理解したうえで、必要な場合には、教科書の発問に追加したり、使用しなかったりといった取捨選択をしつつ、ねらいを達成できるように授業を組み立てましょう。

3. 教科書に掲載されている発問などを1つの例として捉えましょう。

教科書は一般的な指導の仕方を前提として作成されていますので、生徒の実態も一般的な状態が想定されています。「二通の手紙」を例にとって考えてみましょう。「二通の手紙」はすべての教科書で採用されている教材ですが、発問等は必ずしも同じではありません。

元さんが「はればれとした顔」で職場を去ることができた理由を考えさせる発問や、タイトルでもある「二通の手紙」を並べてみたときに元さんが考えさせられた内容を問う発問が多く、教科書で採用されていますが、それにとどまらず、法やきまりの意義について考えさせるものや、ここから今後の自分に生かせることを問うもの、さらには、役割演技を用いてそれぞれがどのように感じていたのかを問うもの、など多様な発問があります。また、この教材では元さんが辞職してしまっていて、動物園の規則を守らなかったことに責めがあるプロットになっているため、場合によっては、杓子定規なきまりの運用に対する問題提起が生徒からなされることもあるでしょう。こうした生徒の実態に応じて、法やきまりの意義について考えを深めることが必要です。

教科書に掲載されている発問などは1つの例と捉え、柔軟に授業を構想して取り組むようにしましょう。

③ 道徳精神・公德心
法やきまりの意義について考えよう

道徳の教科書の使い方

Q 教材を途中で区切って読んでいいのですか？

読み方に制限はありません。ただ、途中で区切ることがねらいの達成にとって不可欠なのかどうかを検討する必要があります。例えば、登場人物が行為を選択する直前で区切って読む場合、登場人物を批判させたいからでしょうか（ア）。あるいは、登場人物の選択に左右されずに自分の考えを深めてもらいたいからでしょうか（イ）。それとも登場人物の選択をよいもの（正解）としてとっておきたいからでしょうか（ウ）。アであれば最後まで読んでから「登場人物をどう思う？」と聞いたほうが批判しやすいでしょう。イもアと同様、登場人物の選択を1つの選択として生徒に理解さ

せたくえで発問した方が多様な視点から考えを深めることにつながるでしょう。ウは1つの正解に向けて生徒を追い込む授業になってしまい、自己を見つめ、物事を多面的・多角的に考え、人間としての生き方についての考えを深める学習となっているとはいえません。区切ることで道徳科で求められていることから離れてしまうことがあるとすれば本末転倒です。ただし、教材が長い場合、途中で区切って読み、そこまでの状況を整理することは生徒の理解を助けることに役立つことが考えられます。

Q 教材提示の方法は範読がよいのですか？

これまで道徳の授業では、教材の提示には範読（教師が読んで聞かせること）が用いられてきました。今後も範読は教材提示の有力な方法でしょう。ただ、中学校の教材は長いものが多く、授業内で範読を行うと時間を多くとってしまうという問題もあります。ですから、いくつかの発問とともに事前

に読んでくる宿題としておく、朝読書で読むように指示する、などの方法も考えられます。また、指導書に付されたCDに教材の音源が入っていたり、教科書に付された二次元コードから関連する情報にアクセスできたりしますので、それらを活用することも考えられます。



Q 教科書の使用義務の範囲は決まっていますか？

道徳科においても教科書（別冊となっているノートを含む）を使用する義務があります（学校教育法第34条）。どの程度使用すれば義務を果たしているのかという基準はありませんが、学習指導要領に示される内容項目をもれなく指導することは求められていますので、年間指導計画編成時に代替教材（自校教材、地域教材を含む）を用いることを決めておくなどして、安易に代替教材で取り組むことは避けるべきでしょう。

とはいえ、年間指導計画を編成するにはまだ学級が編成されないケースもあるでしょう。実際

に生徒と会ってみると、年間指導計画のとおりでは十分ではないということも考えられます。また、その教材が担当する学級で使用することが適切とはいえない場合もあるかもしれません。ですから、内容項目をもれなく指導することを前提に、指導の順番を替えたり、学校内で話し合ったうえで代替教材を用いたりすることも考えられるでしょう。

教科書をどの程度どのように使えばよいのかという明確な基準があるわけではありませんが、使用義務があることは確認しましょう。

Q 道徳的価値やねらい、めあてを自然に気づかせた方がよいのでしょうか？

道徳の授業では、生徒に、「○○が大切だ」（例：「思いやりが大切だ」）と気づかせるのがよいといわれることもありました。しかし、教科書にすでに教材と内容項目の関係は示されていますし、道徳科では内容項目で示される道徳的価値についての理解を基にして学習することが必要なのですから、道徳的価値が大切であるといったことに気づくだけでは、道徳科の授業としては不十分でしょう。

繰り返しになりますが、「道徳的諸価値についての理解を基に、自己を見つめ、物事を広い視野か

ら多面的・多角的に考え、人間としての生き方についての考えを深める学習」を行うと、「○○が大切だ」ということで終わることはありません。「○○は大切だけれども、この場面では△△が優先される」と考えることもあれば、「○○は大切だというけれども、その本当の意味を十分に考えられていなかった」と反省することもあるはずです。「○○が大切だ」ということを出発点として、多面的・多角的に考えを深めていける授業を心がけましょう。